

高機能広汎性発達障害児における自己認知

—あるアスペルガー症候群児との面接を通して—

GH091004：下 園 彩 華

指導教員：吉田ゆり教授

I. 問題と目的

定型発達児の自己認知に関する研究には、Damon&Hart(1988)を始めとした、定型発達児の発達段階から自己を捉えた研究がある。佐久間・遠藤・無藤(2000)は、Damon&Hart(1988)の分類した自己理解モデルを改作し、幼児期から児童期の子どもを対象に発達の早い段階での自己理解の変化を明らかにしており、①身体的・外的属性、②行動、③人格特性の主に3つのカテゴリから自己を捉えている。さらに、滝吉・田中(2009)は佐久間ら(2000)に依って、思春期から青年期を対象に自己理解の変化を明らかにしている。

定型発達児者は、中学生という児童期から青年期へ移行するこの時期に、第二性徴に伴う身体の変化など自己の外的な側面や、他者を気にしながらの人間関係と言った公的側面についても、自己の客観的把握を試みそれを理解しようとすることで自分なりの世界観を形成していこうとする(天谷, 2005)。また、幼児期から青年期後期にかけて、自己概念を発達的に捉えた上で、小学校と中学校の違いは、社会的比較や競争をより強調する(Harter, 2006)ということから、認知発達の上で小学生から中学生への移行期は、他者との違いに敏感な時期であるということが出来る。

このように、児童期から青年期にかけての他者との関係は、自己を形成していく過程に大きく影響を及ぼし、さらに自己認知へもさまざまな影響を及ぼすことが確認されている。

しかし、自閉性障害児者は、診断基準にあるように①対人相互作用反応における質的な障害、②コミュニケーションの質的な障害、③行動、興味、および活動の限定された反復で常同的な様式(DSM-IV-TR)といった特徴を有している。中でも高機能広汎性発達障害児者(以下HFPDD)は、学校などの「健常児集団」の会話の中では、「健常児」が共通理解できる言外の話や前提の文脈が分からず、周囲から奇妙な存在だと思われる発

言をしたり、うまく会話に参加できなかったりするといった語用の障害を持っている(高橋, 2005)。

更に、他者理解の困難さの特性が形成される背景には、「心の理論」の欠如などの問題が挙げられ、HFPDDという広い枠組みだけでなく、自閉性障害という限定した枠組みの中で、従来多くの研究が自閉性障害者における「心の理論」の障害を指摘してきた(室田・菊池・八島・郷右近・野口・平野, 2005)。

HFPDDと関連のある自閉性障害児者の障害特性の研究には、自己の振る舞いを認識することの困難さ(鈴木・郷右近・野口・平野, 2008)や自他の関係性という視点を含めながら自他の情動を捉えることの困難さ(菊池, 2002)、などの自己認知、他者認知の研究も取り上げられている。

そして、自他の認知が特異であるHFPDD児者は、そのような対人場面での問題が、傷つきやすさ(安井, 2003)や、自尊感情の低さ(一門・住尾・安部, 2008)を持つとされているHFPDD者にとって大きな心の傷となり、青年期以降に二次的な障害として出現する例も少なくない(宮田, 上村, 2008)。

さらに、自己に焦点を当てた研究として、佐藤・櫻井(2010)による自伝を用いた質的な分析があり、対人関係だけでなく、対物関係にも着目した、HFPDD者の特性を取り入れた新たな研究がある。

しかし、傷つきやすさ(安井, 2003)や自尊感情の低さ(一門ら, 2008)を持つとされているHFPDD者に対して、このような通常発達者の自己理解発達の方略と同様に見ることの問題は依然残されたままである。

そこで本研究では、佐久間ら(2000)の自己理解モデルを基にHFPDD児の自己認知のあり方を探るとともに、先行研究で明らかにされている定型発達児の児童期から青年期にかけての自己認知と比較検討することを目的とする。

II. 方法

方法を設定するにあたって、HFPDD児に対して自己に関する面接を行う中で、ネガティブな要因を引き出してしまうことが懸念された(須田, 2010)。そこで、幼少期から、本人または学校等への支援がされてきたことが明らかであり、その後の支援体制も整っている研究協力者への面接を行った。

調査対象 アスペルガー症候群の診断を受けた中学生男子1名。

面接時期・場所 2010年9月～2011年3月まで面接を実施し、そのうち12月までのデータを使用する。面接時間は1時間前後。面接場所は、研究協力者と、その母親との相談により決めた。

面接実施の際の手続き 半構造化面接を行うにあたり、基本となる質問項目を作成した。質問項目は、佐久間ら(2000)に依った分析の枠組、①自分の好きなどころ、②自分の嫌いなどころ、③自分のいいところ、④自分の悪いところ、⑤自分をどんな子どもだと思うか、⑥どんな子どもになりたいかというものであった。また、質問項目以外に、研究協力者が自由に語ることで面接を進めた。

分析方法は質的コーディングを行い、逐語文字化したものを佐久間ら(2000)の分析枠組みに新たな下位項目を作成し行った。

倫理的配慮 研究協力者と、その保護者には事前にデータの管理や、得られた情報の管理体制、目的を伝えた。また、調査協力はいつでも拒否できることや、調査協力者に合わせて面接の時間等を組んだ。さらに、事前に研究協力者の障害特性について、適宜指導教員の指導の下に配慮し面接を進めた。面接の後半は、調査協力者のリフレッシュの時間とし、調査面接とは関係の無い、語りの時間を導入した。

III. 結果と考察

身体的・外的属性 本研究において、滝吉・田中(2009)と同様に、身体的特徴についての語りが見られた。中でも、自己の体重の変化についての語りが見られており、第二次性徴期との関連も示唆された。さらに、年齢の変化と身体の成長・発達について研究協力者なりの意味づけをしていることが特徴的であった。さらに、外的属性に関しては「人間」という大きな枠組みでの属性語を

用いており田中(2008)の定型発達児4歳～8歳の回答に見られるものであった。

行動カテゴリー 行動カテゴリーに関しては、能力評価を含む行動について多くの下位領域に分類された。本研究では、活動に関して、他者との双方向的なやりとり関係の中での活動に関する言及は無く、肯定/否定のどちらとも捉えられない中立的な回答であった。さらに、能力評価を含む行動の下位カテゴリーである注意関心カテゴリーのほとんどが嗜好に関する語りであった。さらに、中位領域の下位カテゴリーにある不得意、特性、の中には「責任感がない」や、「説明が下手」などのネガティブな発言が多く見られていたが、共に有能感「教えるのが上手い」、「語ってお勧めができる」などのポジティブな発言も見られた。

人格特性 人格特性領域において自己を認知する際は、他者からの評価や他者懸念、羞恥心などの発言がみられたことから、滝吉・田中(2009)と同様に、他者との相互的なやりとりや関係を通じた言及が多いことが示された。さらに本研究での特徴的な結果として見られた下位カテゴリーにおける保守的な意味づけは、否定的なことを肯定的に意味づけ、傷つきを回避しているような発言が見られたこと、さらに、特性に関して、否定的な語りと共に有能感についての語りもみられたことであった。

以上のことから、HFPDD児が定型発達児と同様の自己認知の様相を見せるが、その内容において極端に注意関心によったものや、定型発達児のもつ有能感とは特異なものであること、などが明らかとなった。

さらに、これまで幼少期から語りの場を持ち、支援の体制が整っていた本児は、自己の表象や自己に対する評価を他者に伝える事に慣れているという事や、そのような支援者的な役割の保護者の存在や、周囲からのフィードバックを受けていることが、本児における自己の認知に影響を及ぼしていることが推察された。

今後の課題 下位分類不能となった本児の自己の様相に関して、本児の障害特性と重なると思われる様相が示されていたことから、今後障害特性とのつながりについて検討していく必要があることが示唆された。